

# 論文の和文要旨

論文題目： 深沢七郎論 —— 近代を見つめる土俗の眼差し

氏名： 高 艶

『檜山節考』で知られる作家の深沢七郎（1914～1987）は、近代文学史における極めて独特で異端的な存在であり、その波瀾万丈の人生において数多くの土俗世界を描く名作を生み出し、その近代化を批判する姿は今日の読者の目にも鮮烈に映っている。本論は、今までの研究成果を踏まえて、創作モチーフ、書き方、それに創作意識などの分析によって、深沢作品における「土俗的原風景」を全面的に解説した。テキスト分析、及び多元比較の手法を駆使して、深沢の文学の土俗性とその価値を再発見し、彼が近代的読者に与えるインパクトと作品の魅力を改めて解明した。また、戦後の高度経済成長と急速な都市化という背景の下に、地縁血縁の共同体に基づいた土俗的思考を貫こうとした深沢の、「近代批判」の姿勢についても分析を試みた。この「異類作家」の作品は、実は自然によって人間を定義する発想と、土俗的感覚を踏まえて近代を見つめる眼差しで織られたものであり、「人間の真実」を深く凝視したものである。

第二章からは、「土俗的世界の構造と様態」、「土俗的世界の変貌と近代主題の登場」、「土俗に基づいた天皇意識、及び近代を眺める視線」について、さらに「土俗に根差した死生意識と人生観」は四章において、深沢の初期、中期と後期の作品について論じた。

第二章では、主に深沢のデビュー作『檜山節考』と長編小説の代表作である『笛吹川』を踏まえて、作家の土俗的生存感覚に基づいた創作原点を分析した。深沢は、庶民的生活への憧れを抱き、自然との調和を求めながら近代文壇に踏み込んだ。

『檜山節考』で戦後文壇に初登場した深沢は、故郷甲州・石和に由来する土俗味の濃い作品を作り上げた。彼は絶対的自然の掟を大前提として、土俗的摂理に従って尊厳を持つ理想的な老人を描き、「個人」の姿に注目しながら土俗的庶民世界を構築した。同じく「姨捨」のモチーフを取り扱った堀辰雄や井上靖など作家の作品と比べて、深沢が「自然」を絶対・至上な存在と位置づけ、近代人の傲慢さを徹底的に否定した。この作品は、近代文学が提唱する方法論と思想性をも排除し、あまりにも「方法過剰」な近代文壇の中に光ってみえたのである。古典モチーフの変調、「半全知的語り手」、自然のリズムと人間の生声のハーモニーがその創作の特徴である。

1958年4月に書き下ろしの単行本『笛吹川』は、深沢の初めての長編小説である。こ

の作品においては、作家が前近代的庶民の日常感覚に注目し、歴史的イベントを踏まえて「ギッチョン籠」一族の土俗的時間意識と生死の構図について物語を展開させた。メタ語りの下に、「逆手」と「隠れ手」を通して、無責任で傍観するように物語を進めながらも土俗世界の完全性と独立性を確保するのは、『笛吹川』のユニークな叙述法である。また、深沢は「反復」、「焦点の移転」などの書き方を通して、「民話作品」と「歴史小説」を離れた独自の物語世界を構築した。土俗的空間、庶民的発想とライフスタイル、登場人物の人生を眺めた「自然」の眼差しなどは、深沢の独自の「土俗世界」を成した。生活実感から、価値観と美意識まで、作家が近代的イデオロギーを引っ繰り返す「土俗原理」を押し出した。

1960年頃になると、深沢の作風には変化が生じた。第三章では、共同体の再現と崩壊、女性イメージの変化、それに作中の都市空間と自然風物などの問題を試論した。これは、土俗世界が近代化によって崩壊される危惧を感じつつあった一方で、その近代化の虚さに気づいた深沢が、「近代」に対応する生き方を探っていた時期である。

『甲州子守唄』は、深沢の60年代の作風転換期の代表作である。自然の理の絶対性あるいは権威性ははるかに希薄化されたこの作品において、オカアが必死に維持してきた「家・村落共同体」は、徳次郎に代表された強力的な近代化によって崩されてしまった。作家は冷淡な口調表現を用いて近代の形骸化と空虚さを語り出した。

「土俗的世界」の崩壊の問題を一層深く分析するためには、「先鋭的かつ土俗的な方法論」を示した中上健次との比較を通して、深沢と中上作品における「土俗空間と主人公の変貌」の異同について比較検討を試みた。この試みによって、土俗的な空間を構築することを通して、心の原風景を再現するのは、深沢と中上創作の重要な原動力とモチーフであると思うに至った。そして中期作品においても、「甲州の土俗世界」と「熊野の路地」は共に消滅の危機に陥ってしまった。人間のすさまじい「生の力」を注目した中上と、人間の「特権視」を強く否定した深沢は、土俗的原風景を失ってからどのような姿勢で近代に接するのかという問題に対して、全く違う答えを導き出した。土俗的世界の問題以外は、自然に基づいた「母性原理」も深沢と中上創作の共通したモチーフである。母への特殊な感情は、彼らの作品の出発点でありながら、その創作の重要な原動力の一つである。中上は母の強い権威から身を抜き出して、自我確立の道を探していたが、深沢は逆に文学創作を通して、「土俗的老婆」への同化を求めようとしていた。路地育ちであり、路地を離れて土俗の世界を眺める視線で創作を展開した中上と比べると、一生の間、庶民の世界に入れるよう努力をし続けた深沢は、「土俗作家」というより、「土俗志望の作家」と呼んだほうが妥当であると考えられる。

第四章では、深沢が土俗的世界を構築する手法、及び「大庶民」と「近代人」を観察する眼差しを解明する上で、彼の創作と人生に大きな異動を起こした「風流夢譚事件」の問題を論じた。

『風流夢譚』という作品において、世の中の混乱と人間不信の情緒、天皇の変質、それに盛り上がった「左翼」などの近代的問題とぶつかった深沢は、伝統と近代の両方を統合した「天皇」を通して、自分の戦後社会への複雑な感覚を並べ立てた。当時注目度の最も高い皇室を主題として、近代化の可笑しさと伝統の弱さを揶揄しながら、彼は自分自身のスキゾイド的感覚を「夢」という特別なメカニズムを通して表現した。この作品から、土俗「伝統」と近代の激しい衝突を読み取ることができる。

深沢の天皇意識を一層深く理解するために、天皇処刑を主題とした『風流夢譚』を認めた三島由紀夫の『憂国』と『英霊の声』の創作との比較を試みた。戦後民主主義と「人間天皇」への困惑、それに経済発展と物質的実利を追求する近代人の生き方への拒否は、深沢と三島の同調するところである。『風流夢譚』で処刑された天皇と、『英霊の声』で告発されている天皇は、深沢と三島の接近した感性によって形象化されているのではないかと考える。ところが、天皇の権力性に関しては、深沢も三島も相反する意見を示している。深沢の権力への嫌悪と三島の絶対的の神威への追求の間には、克服不可能なギャップがある。また、「死」を通して近代と戦後天皇制の葛藤に対応する解決策を求めた『風流夢譚』、『憂国』、それに『英霊の声』とは異なり、深沢の『安芸のやぐも唄』は、戦後社会における「断絶的」な生き方を示している。これは、深沢の戦後社会における生の悟りを語り出した重要な作品であると考えられる。

近代的ヒューマニズムなどの思考と無縁な深沢は、「生の時間から死の時間への平面的な移行」という事実を諦観している。近代的な自我の確立といった大命題へ向かっていた近代文壇において、自然的視線と庶民的発想を文字化した深沢は、間違いなく「異類・鬼才」のような存在であろう。第五章では、自然意識と庶民志向、死生観と「近代」への見方などの問題を通して、深沢が土俗意識を踏まえて戦後社会を眺める超越視線についての試論を展開した。

1965年から、深沢はラブミー農場への移住を果たし、「隠者・世捨人」として晩年を送った。「近代の侵食」に直面した彼は、一層冷徹な視線で戦後の民主主義社会を観察し、近代的ものを固く疎外しながら晩年を過ごした。それに伴って作家の近代における「隠者・世捨人」の姿が次第に定着するようになった。『人間滅亡的人生案内』から『無妙記』までの晩年創作において、深沢は自然と土俗に基づいた「生の哲学」と「死の視線」を示した。「死」という絶対的な終点から出発し、「生」を眺めたり再定義したりすることが、深沢晩年作品の特に示唆的なところである。「生」自体への拘りを破り、「無」という悟りを開いた深沢は、人間を理解する新しい道を示唆している。

間引き（中絶）された赤ん坊（胎児）の顔をした人形の群像は、深沢晩年の代表作である『みちのくの人形たち』と、中国作家莫言の代表作『蛙鳴』との共通したエピソードである。この二つの土俗的作品を比較することによって、共に「人形」というメカニズムに「命」を託したという点において、中国と日本農村の土俗的生存感覚を試論した。莫言作品中の批判性と暴力性と比べ、深沢の創作は、その人間個体を超えて、「生」と「死」

などの自然性を踏まえて成立したものであると言えよう。

土俗的世界と庶民的生き方に憧れを抱いた深沢七郎は、鋭い筆触、冷徹な視線と揶揄とトボケの口調で戦後の近代社会を抵抗・批判した。人間の自然性を踏まえて、日本人の失いつつある原風景を執念深く追求した深沢七郎。自然に対して人間の傲慢さをからかいながら戦後社会に対して孤高で敬遠な態度を取った彼は、土俗的原風景を一生かけて追求した「理想家」であった。「土俗志望の作家」である深沢の「近代」を拒否する意識、また近代を生きる人々の超克できない生死観という人間の本質的な問題に迫った姿、自然を畏敬し、それと共生するという人間の有るべき姿を絶えず押し出すところなどから、深沢文学の醍醐味を真の意味で味わうことが可能である。深沢文学に漂うブラックユーモア、それに「土俗」への向心力は、まるで孤立する「霊山」のように、時空間を越えて教訓を知らず、教訓より学ぼうともしない傲慢な人間達を冷徹に眺めている。